

酒田駅前まちづくりシンポジウム 記録

平成 29 年 12 月 10 日（日） 13 時 30 分～16 時 30 分

酒田市公益研修センター 大ホール

司会（酒田市企画振興部都市デザイン課長）：

ただいまより「酒田駅前まちづくりシンポジウム」を開催いたします。はじめに、酒田市副市長矢口明子よりご挨拶申し上げます。

副市長：

本日はこのようにたくさんの方にお集まりいただきありがとうございます。酒田駅前再開発の現状ですが、昨年 6 月に再開発事業者が決まり、この 1 年間は基本設計を進めてまいりました。本日のパンフレットに基本設計の概要の一部を載せてございます。

民間と公共施設の合築、複合施設になっています。公共施設はライブラリーセンター、観光情報センター等から成ります。ライブラリーセンターは、現在の中央図書館を移転します。なぜ駅前に図書館なのか、酒田市は駅前にこのような施設をつくることで何を指すのか、駅前再開発を通して酒田のまちづくりをどうしていくのか、多くの質問をいただいております。そこで本日、このようなシンポジウムを企画しました。「図書館を核とするまちづくり」の先進事例として、東京都武蔵野市の「武蔵野プレイス」、岐阜県岐阜市の「岐阜市立図書館」、それぞれの事例について紹介いただき、それをもとにパネルディスカッションを行います。

このシンポジウムが、駅前再開発で私たちが何を指すのか、みなさんで議論して共有する機会になればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

司会：

基本設計の資料については、会場の外にもパネルで貼っているので、休憩時間や終了後にご覧ください。

それではこれより、基調講演を行います。お一人目の講師をご紹介します。本市の友好都市であります東京都武蔵野市より、公益財団法人武蔵野生涯学習振興事業団の前田洋一理事長をお迎えしました。前田様には、「武蔵野プレイス～新しいタイプの公共施設を目指して～」と題し、昨年度 195 万人もの来館者を記録した「武蔵野プレイス」がなぜこれほどまで利用されているのか、その先進的な取組みについてお聞きしたいと思います。前田様、よろしくお願いいたします。

前田氏：

みなさんこんにちは。ご紹介いただきました前田です。当事業団は、武蔵野プレイスと市立体育館をはじめとした体育施設群の指定管理者として管理運営を行っております。武蔵野

市と酒田市は友好都市として長い間の交流があり、市の職員同士の交流もごさいます。そう
したご縁もあり、講演をお引き受けいたしました。

講演の前半は、なぜ武蔵野プレイスのような公共施設を建てるに至ったか、どんな目的があ
ったのかについてお話します。後半は、施設のミッションを達成するためにどんな仕掛けを
しているかについてお話します。

武蔵野市は東京都のちょうど真ん中、23区と市部の間にある市です。JR中央線の駅が吉
祥寺、三鷹、武蔵境と3つあります。市の面積が10.98km²と非常に小さい市ですが、ここに
人口が14万4千人ほどで、人口密度は埼玉県蕨市に次いで全国2位です。酒田市と比べま
すと、武蔵野市は面積は55分の1ですが人口密度は73倍あります。

武蔵野プレイスの正式な名称は「武蔵野市立ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス」
という長いものです。独特の丸い窓を持った外観で、平成23年7月に開館し6年を経過し
ました。地上4階地下3階、約1万m²の建物で、JR武蔵境駅の目の前の立地です。開館時
間は周辺住民のライフスタイル等を考慮し、平日土日とも9時半から22時までとなってい
ます。年間195万人の来館があり、当初の想定80万人を大幅に上回っています。多い時で
1日に9,500人くらいきます。

非常に長い計画の期間を経て出来あがっております。元は食糧庁の倉庫があった土地で、昭
和48年から長い売却交渉の結果、平成10年に土地の利用計画書を武蔵野市が作ることで
ようやく具体的に計画がスタートします。この計画が武蔵野プレイスの原型です。その後土
地を取得し、平成14年には「新公共施設基本計画策定委員会」を設置、建物に魂を入れる
ための検討を行います。平成15年に設計者を選定するプロポーザルを実施しましたが、そ
の時の選考委員会の副委員長が今回パネリストである倉田先生でした。そして平成16年
には設計者も入れた委員会をつくってそこで施設計画を作成していきました。

平成17年には基本設計も完了するのですが、同じ年に市長が交代します。新市長は施設規
模を見直すことを公約にして当選したのですが、議会がこれに反対して平成18年度の予算
を否決、暫定予算を組むという事態になってしまいました。この時に私は担当課長となり、
専門家会議を立ち上げ、会議の答申を尊重するという形で暫定予算を回避したうえで、基本
設計の見直しを行って、平成20年に「武蔵野プレイス（仮称）管理運営基本方針」を策定、
21年度に着工、23年度の開館にこぎつけたということになります。

武蔵野プレイスは、図書館のほか、市民活動支援、青少年活動支援、生涯学習事業という4
つの機能を持った「複合機能施設」です。この4つの機能の連携、融合によって新しい価値
を生み出す施設です。普通の複合施設は、例えば1階から3階が図書館、4階が市民活動支
援センター、5階が生涯学習支援センター、のようにフロアが分かれ、やっていることもバ
ラバラ、たまたま一緒にいるだけ、というところが多いのですが、武蔵野プレイスはさまざ
まな機能の集合体として一つの建物を形成しています。それにより一歩上の付加価値サー
ビスが出来る、これが新しいタイプの公共施設ということになります。単なる寄せ集めでな
く、配置の工夫をして、複数の機能が集まるメリットを最大限に活かした施設とすることで、

従来型の公共施設の枠組みを超えて、利用者の多様な活動や利用に応じ、個々の機能の役割を超えた新しいサービスを提供しています。機能が相互に連携し、幅広い市民による交流の「場」となるようにしています。利用者は自由にそれぞれの機能を使ってもらい、管理運営側はそれを総合的にサポートすることで、付加価値のある情報サービスが提供できると考えています。

このような施設を設置する上での基本的な認識ですが、まず「価値観の多様化、急速な情報化」があります。その中で重要なのが「自己の責任で主体的に判断し行動する」ということです。できるだけ正確な情報に基づいて、市民が主体的に学習できる機会の提供、地域の課題を解決する上での判断材料を提供し、その活動を支援する仕組みが必要になっています。さらに現在は、インターネットや ICT の進展により、社会的な機能の大部分がデジタル化されています。個人は以前よりもコミュニティから遊離した状態に置かれやすくなっている。そういう状況の中で、人々が集い、交流できる場としての公共施設の役割は、以前にもまして重要になっています。

「ひと・まち・情報 創造」という施設名が、武蔵野プレイスの性格を端的に示しています。複合している 4 つの機能が、これまでの公共施設の類型を超えて積極的に融合し、図書や活動を通して人と人が出会い、それぞれが持っている情報（知識や経験）を共有・交換しながら、知的な創造や交流を生み出し、地域社会＝まちの活性化を深められるような活動支援型の公共施設を目指しています。

フロア構成図を見ていただくと分かりますが、例えば図書館機能をわざと各フロアにばらけさせています。各フロアでゆるやかに機能を分け、1 つ 1 つのフロアで異なった機能を共存させるようにしています。開館当初は評判が悪かったんです。従来の図書館利用者は「何でこんなに分けてしまうんだ」と。こちらとしては、分けることで、いろいろなフロアに行っていていろいろなことを経験していただきたい、と説明しました。

年齢も目的も異なるさまざまな市民がこの場所に思い思いに集ってもらい、館内をめぐり歩き（ブラウジング）、その中で目的外の活動や情報に触れることで、さまざまな気づきや出会い、交流が生まれる場を提供することで、市民一人一人の新しい活動や文化が生まれることを支援しています。

図書館についてですが、施設の基幹機能として他の機能と連携を図りながら、さまざまなライフステージに対応した「滞在型図書館」を目指しています。この「滞在型」ということが重要です。インターネットがあるから図書館はもう不要ではないか、という方もいらっしゃいます。もちろんインターネットにある情報も有用なものだと思いますが、それが必ずしも正しいものとは限らない。それを補完するツールとして図書館は重要と考えており、図書館の新しい価値を生み出すものではないかと考えています。

武蔵野市立図書館全体で 90 万冊くらいの蔵書がありますが、武蔵野プレイスだけで貸出数が 100 万を超えています。プレイス 1 館だけで市立図書館全体の蔵書数より貸出数の方が多いという、極めて異例な現象が起きています。

施設をつくる上で重要なキーワードが7つありました。一つ目が「目的利用から状況利用へ」。私たちのミッションは、さまざまな目的をもった利用者がさまざまな「居方（いかた）」、過ごし方ですね、を可能にすることです。ある人は調べものをする、ある人はイベントに参加する、ある人は仕事の続き、ある人はふらっと寄ってコーヒー飲みながら雑誌を読む。そのようなさまざまな居方、過ごし方を可能にする仕掛けをいろいろと考えてきました。

「目的利用」とは、あらかじめ明確な目的を持って施設を利用することです。対して「状況利用」とは、状況に応じて施設を訪れたり、ふらっと立ち寄ることです。私たちは目的利用から状況利用へシフトし、施設自体に人を引き付ける魅力を持たせること、開館時間を長くしたりカフェを置いたりする仕掛けをしました。

二つ目は「新たなターゲット」。従来の公共施設は、高齢者等比較的時間に余裕がある層に手厚くサービスをしてきました。ビジネスワーカーはあまり視野に入っていなかった。そういう方々は忙しいのであまり公共施設にはいらっしやらない。来ないということはそもそも公共施設にあまり期待もしていない。期待もないのでクレームも来ません。クレームが来ないと、行政サービスの視野から外れてしまいがちです。しかしこの層は、税金を納めている重要な層です。そういう方たちにぜひ利用してほしい、そういう施設をつくりたい、ということで新たなターゲットに設定しました。方法としては、1階のカフェは図書を持ち込みますし、夜はアルコールも提供します。図書の持ち込みについては、議会でも市の財産である図書にコーヒーをこぼしたらどうするのか、という質問がありました。私は答弁で、図書を借りて家に持って帰っても、家でコーヒーを飲みながら読む場合もある。それでこぼして汚してしまったら、弁済するというルールがある。それは単純にルールを適用すればよい。そんなことよりも、場を提供する、さまざまな目的に応じた環境を作ることの方が大事であると考えている、と答えました。アルコールも同じです。アルコールを提供するのは目的ではなく手段です。サラリーマンが帰りがけにお酒を飲んでクールダウンする、そういうことができる方がよほど重要だと。図書館は教育施設なので、多くの教育関係者から、何を考えているんだ、あり得ない、議論の余地はない、酔っ払いが暴れたらどうするんだ、と言われました。施設のミッションをずっと言い続けて納得いただきましたが、これまでアルコールによる事件は1件もありません。図書の汚破損も家に持ち帰ってからの方が多いです。使う方はちゃんと考えていただいていると思います。

カフェの存在は非常に重要です。カフェ業者はプロポーザルで選びましたが、業者には3つのことをお願いしました。1つは「クオリティをしっかりと確保すること」。今までの公共施設は「安く提供してほしい」という要望が強く、結果としてクオリティが下がり、負のスパイラルになって撤退する、ということが起きてきました。カフェにはクオリティを保ってしっかり客をつかんでほしい、とお願いしました。2つは「施設のミッションを理解して第5の機能になってほしい」、3つは「アルコールを提供できる能力を持つておくこと」。2つ目については、いろいろなことをカフェでもやっています。いろいろなテーマで本を紹介しあうなどのイベントを行って、参加者同士仲良くなって帰っていくそうです。

4階のワーキングデスクもビジネスワーカーを取り込むための仕掛けで、間仕切り、電源、照明を付け、書斎のような雰囲気になっています。お金を取るのはいかがなものかという意見もありましたが、土日もほとんど席が埋まります。やはり静かなところで仕事をしたいというニーズがあります。ある方がブログで、ここで仕事をしていた時に、ちょっとのどが乾いたらカフェがある、調べたいと思ったら図書館がある、自分がしたいことがここで完結した、と書かれていました。たいへん嬉しい使われ方だと思っています。

図書館の三つ目のキーワードは「賑やかな図書館」です。これは昔の図書館のあり方に疑問を持とうじゃないか、というのが出発点です。社会が変貌を遂げているので図書館が変貌してもいいじゃないか、もっといろいろな使われ方があってもいいじゃないか、ということで、発想を変え、賑やかな側面もあっていいということで展開しています。1階はカフェがあったりして賑やかで、その音は吹き抜けを通して2階の児童書コーナーにも入ってきます。2階は親子で楽しんでもらおうということで、同じフロアに生活関連の図書を置いています。利用者に分かりやすくするために、ここの本の並びは一般の図書館の分類ですが、書架の側面の本の分類表示は、素人が見ても何の本が並んでいるか分かるように図書館の分類を採用していません。いわゆる街の本屋さんの表記です。同じ法律の本でも、近所とのもめごとの本は2階に置き、逐条解説のような専門的なものは地下階にあります。司書はどのフロアに置くかを考えながら本を買っています。

1階のギャラリーは多目的な空間で、講座などをやっています。この空間をどうやって使おうかとしたときに、最初に手を上げたのが図書館員で、ミニコンサートを提案しました。図書館担当係長の顔が青ざめていましたが、私は、施設のミッションを考えろ、ここはいろんな目的で人が来る、やってもいいじゃないか、もしクレームが来たら「ここはこういう目的をもった施設なんです」と丁寧に説明すれば必ず解ってもらえる、そしてやっているうちに慣れてくる、と。夏は夏祭りを公園で行います。夏の2日間の夜、音が気になる方は来館しないで下さいと話さないと言っています。

四つ目は「貸出、返却などの自動化」。機械でできることは機械にやってもらい、フェイストゥーフェイスでやるべきことを職員にしっかりやってもらう。司書の解放と私は言っています。カウンターはじっくり利用者の声を聞く、話す時間を設ける、そういうウェルカムな姿勢を示すことで、カウンターの雰囲気が明らかに変わります。当日返却された本の仮置きコーナーもよく利用されます。返却を見せる化する取り組みです。利用者の方は、どんな本が借りられているかに興味があるものです。

五つ目が「雑誌タイトル数の充実」で600誌あります。これは雑誌の即時性と専門性に着目したからです。他の媒体と比べると、新聞は即時性が高く一定の専門性もある、本は専門性は高いが即時性には欠ける。雑誌は即時性、専門性もそこそこであり、そこに娯楽性が加わる。蔵書がそれほど持てないこともあり、雑誌を増やしています。たいへん多く利用されています。

六つ目は「敷居をさらに低く」。図書館は間違いなく市役所より敷居は低い。図書館はちょ

つとした課題解決の受け皿、市の緩やかな窓口の一つとして、図書が介在しなくても窓口でも聞いて下さいというウェルカムな姿勢を示すことで、仮にその場で解決できなくても汗をかいて対応することで、市民は「あ、こんなことでも相談できるんだ。また来てみよう」と思ってもらえる、そういう雰囲気づくりを大事にしようと言っています。

七つ目は「青少年へのアプローチ」。公共施設には意外と青少年の居場所が無いんです。そういう場所を作ってあげたい。青少年のフロアはルールが緩いです。おしゃべり、勉強、飲食OKです。電子レンジもお湯もあります。最低限のルールを守ってもらえれば何をしても構わない。家具もいろんなものを用意して、いろんな居場所を作っています。バンド練習やボルダリング、ダンスの練習もでき、本当にいろいろな活動に使われて、とても楽しい空間になっています。しかし、本に興味のない子はなかなか本を見てくれないので、図書館からここに本をデリバリーするなどアプローチしています。同じフロアの横には、ガラス1枚隔ててアート系などを1万冊、青少年に興味があるだろう本を8千冊くらい置いて、少しでも本に触れてもらえればと思っています。

「利用者の声コーナー」を1階の一番いい場所に置いています。要望に対する回答をほぼ全て書いています。特にできないものに関しては丁寧に回答します。開館当初は、例えば1階のカフェは止めろというような声がたくさんありました。しかしミッションを丁寧に説明し続けることで、応援団が出てくるんです。「負けるな！」なんて声が出てくる。それが職員の見え方になっています。

利用者の役に立つ施設、末永く愛される施設を目指しています。シームレスな公共空間とすることで、利用者がさまざまな機能を違和感なく利用できるよう、敷居を低くしていく。なおかつ日常に密着した施設、地域の一員として頑張りたいと思っています。

実現できていることはまだ一握りと思っておりますし、地に足を付けて一步一步あせらず、施設のミッションに近づけるように運営していきたいと思っています。少しでもみなさんの参考になればと思います。ありがとうございました。

司会：

前田理事長、ありがとうございました。武蔵野プレイスが、利用者の役に立つ施設、末永く愛される施設となることを目指して、従来の枠にとらわれない多様な利用のしかたを提案していること、それが利用者のニーズにマッチし利用者を増やしていることを知ることができました。

続きまして、「子どもの声は未来の声～本がひととまちをつなぐ～」と題しまして、岐阜市立図書館館長の吉成信夫様よりお話しいただきます。吉成様は平成27年4月に、全国公募に応じて「ぎふメディアコスモス」の中にある中央図書館を含めた岐阜市立図書館の館長に就任されております。図書館の中にこどもたちの声が響くことを当たり前のこととし、数々のユニークな取組みを展開して利用者を掘り起こし、開館1年目にして120万人を超す利用者で賑わっている図書館です。「本がまちとひとをつなぐ」とは一体どういうことなのか、

図書館がまちづくりとどう関係しているのか、興味深いお話が聞けるのではないかと思います。吉成館長よろしくお祈いします。

吉成氏：

みなさんこんにちは。はじめまして。ご紹介いただきました吉成です。ただいま前田さんからプロセスも含めてバランスよくお話がありましたので、私はむしろ、ハードからソフトへ、ハードはできた、一流の設計者が作ってくれた、そこで終わってしまう図書館というのもたくさんある。私は図書館の中でできることがいろいろあると思って、全国公募で図書館長になりました。

岐阜から来たので、岐阜のムードを振りまきながらとも思いましたが、昨日酒田に来まして、やはり東北ですね。私岩手に19年間いまして、宮澤賢治が好きで家族で岩手に移住したら、ほんとうに宮澤賢治の博物館をつくることになり、「いわて子どもの森」という施設をつくったり、いろいろやってきましたが、図書館だけはやったことがない。そういう人間がなぜ図書館をやったのか、そういう話をしていきたいと思ひます。ですのでできるだけ具体的に、何をやったのか、どういふ細かいところを工夫してやってきたか、というポイントを中心にお話したいと思ひます。

岐阜市は中核市で人口41万人、名古屋市から30kmくらいしか離れていません。「ぎふメディアコスモス」は複合施設で、スターバックスもローソンもあり、市民活動交流センターやホール、アートのアトリエがあつたりしますが、3分の2は図書館です。図書館を中心としながら他の機能も混ざりながらオーバーラップしている施設です。延床面積は約15,000㎡です。

この図書館の活動を規定するのは、「中心市街地」の中になぜつくつたか、ということがあります。JR岐阜駅の北側、長良川までの間の細長い3kmくらいが中心市街地で、その真ん中あたりに柳ヶ瀬の商店街があります。かなり大きな歓楽街でしたが、今はシャッター通りになっています。ただ、若い人たちが住み着き始めて、新しいまちづくりを始めてもいます。そういった人たちとも結びつきながら、図書館の活動は生み出されてきています。図書館は市街地の北の端にあり、柳ヶ瀬を真ん中に挟んで、どうやってこの中に新しい人の対流を巻き起こしていくか。そのために図書館がある、ということです。

「せんだいメディアテーク」をつくつた伊東豊雄さんが20年ぶりくらいに図書館を設計した施設です。非常に広い施設で、2階が全部図書館です。80m×90mというグラウンドのような空間が、バーンと全部抜けているようになっています。

全国公募で私が赴任したのが、まだ2年前です。ここも「滞在型図書館」です。長く居られる、席がたくさんある。こういう長く居られる図書館といふのは、今まで無かつたんです。図書館は本を貸したり借りたりするところ、もちろんレファレンスの機能、調査研究、相談できるスペースもありますが、基本的に図書館は本を借りるという目的利用ですね、それが図書館の機能だった。ところが、この図書館は中心市街地につくつた施設です。岐阜市には

58年前から使っていた古い古い図書館がありました。その図書館の年間の来館者数は、推計値ですが15万人くらいでした。岐阜という中核市の中央館でそれくらいしか人が来なかった。ところが、それが移転するというので、私が公募で赴任してから、「吉成さん、この数字を達成してください」と渡された目標数値が100万人だったんです。15万人から100万人って、机上ではいくらでも計算できますが、とんでもない数字です。本が嫌いな人、見向きもしなかった人をどうやって振り向かせるか、というところからスタートしなきゃいけないということです。

100万人という数字と建物ができる以外に何の羅針盤も無かったので、赴任して10日間くらいでコンセプトシートをつくりました。スタッフは69人いました（現在は75人）。司書でもない人間がいきなりきて、「あんたに分かるのか？」という顔をみんなしていました。そこで最初に私は全員に「この図書館は図書館を目指しません！」と言ってしまいました。何を目指すかという、100万人を達成するために、図書館からさらに広角にエッジを伸ばしていくことを考えました。一つの方向性は、「まちとつながる ひととつながる」「まちライブラリーをつくる」「ライブラリークラブをつくる」。つまり市民と一緒に図書館をつくっていく。図書館には本の専門家の司書がいます。司書が本を選んで並べているのが図書館です。でもそれだけだと、市民が関わりようがない。単にサービスを受ける対象でしかない。そうではなくて、市民も図書館に関わって図書館を変えていく、成長させていく、と考えたら、ちょっとドキドキしませんか？ 本棚を市民がつくったっていいじゃない、そういうこともやってみたいと思いました。この方向性をずっと伸ばしてきました。

もう一つの方向性は、「学校と図書館との連携」です。岐阜市は学校司書が全校に配置されていますが、みな一人で孤軍奮闘していました。学校との間に市立図書館が入って学校司書を支えようと考えました。私は各地の学校に通って、あちこちで給食を食べています。そこからいろいろなものが見えてきました。

図書館に何人来たからOK、とはしたくなかったんです。まち全体としてどうなったのか、まちなかという関係がつかれるのか、図書館を通じて、本を通じてどんな楽しい人と出会えるのか、仲間をつくれるのか、そういうことを考えることができる図書館にしたかったんです。

開館1年目で123万3965人が来館しました。岐阜市の中では考えられなかった数字です。翌年はさらに増え、今でも毎月10万人くらいで推移しています。マスコミの人達から「今の図書館と昔の図書館とどこが変わったんですか？」と聞かれます。一番変わったのが年齢層です。40歳以下の利用割合が、以前は30%弱でした。高齢世代が中心に来ている図書館でした。それが58.7%にアップしました。こどもが来て、さらに子育て中のお父さんお母さんが来るようになったんです。今まで来なかったんです。なぜか？ 駐車場がなかった、バリアフリーでない、もうひとつ大きいのが、ベビーカーで来てちょっとでもこどもが泣いたら司書に「外に出てください」と言われた。若いお母さんはもう心臓バクバクで来ていたわけです。

うちの図書館は、壁がありません。90m 先まで見えるわけです。咳一つしても向こう側まで聞こえる、赤ちゃんが泣いたらウワッと向こうまで音が行きます。何が起きるか想像がつかますよね。これはもう、ハードとソフトが正反対を向いて運営したら目も当てられない図書館になってしまいます。

そこで何をしたかという、ベテランの職員も含めて、みんなでこの図書館を使いこなすには何をしたらいいのか、どういう本の配列にしたらいいのか、本の貸し借りだけではない、来た人とコミュニケーションするとはどういうことなのか、ということオープンまでの3か月間ずっと考えながらオープンの前日まで取り組みました。

「私たちが大切にしたいこと」、この図書館の理念ですね、これを言葉で書いてカウンターの後ろに貼りだすことにしました。これを思いついたのはオープンの2日前、朝歯を磨いている時です。「子どもの声は未来の声」という言葉が突然思い浮かびました。「私たちの図書館では、本を通じて子どもたちの豊かな未来へとつながる道を応援したいと考えています。就学前のお子さまから、小中学、高校に至るまで、長い子どもたちの育ちを末永く見守る場所でありたいと思うのです。」本を貸したり借ったりする関係だけではない、子どもたちを見守っていくよ、ということを行っています。「だから、私たちは館内で小さなお子さまが少しざわざわしていたとしても、微笑ましく親御さんたちといっしょに見守ります。来館されたみなさまも、どうぞそのような考え方をもちた図書館だにご理解いただければ有り難いです。」ということをあえて申し上げました。そしてここからが大事だと思っています。

「そして、小さなお子さまのお父さま、お母さまにもお願いします。ここは公共の場所です。遊び場、運動場ではありませんので、公共の場所でのマナーをお子さまに教えていただく場としてもご利用いただければ幸いです。」公共の場ですから、みんなで一緒にルールを考えていこう、ということ。「みんなでお互い様の気持ちを持ち寄る場所にしていきましょう。」つまり図書館は、「公園であり広場である」という考え方です。

ここからは画像を見ながらお話しします。「親子のグローブ」と呼んでいる場所があります。この大きな電球のような傘の下に入るとシェルターのように感じて、包まれている感じがします。だけど見渡しはききます。ここは0歳児から2歳児とそのお母さん、それから妊娠中のお母さんたちの社交場になっています。午前中からものすごい数のベビーカーが並びます。これは「リビングルーム」ですね。北欧などでも公共施設のキーワードは今「リビングルーム」です。リビングルームって家の中ですよ。日本の家屋には、家の中でも外でもない「縁側」という部分がありました。私は図書館は縁側であると思っています。ここでは2歳児がウトウト寝ていてもかまわない、親子で寝転がって本を読んでもかまわない、こどもがゴロゴロと転がっていても注意しない。でもこの年代から図書館に来ることの味をしめたら、ずっと図書館に来ますよね。小学校4年生のこどもが10年たったら成人します。今度は岐阜市を支える側になるわけです。家族を持って、おじいちゃんおばあちゃんになるまで、ずっと使い続けるわけです。長い付き合いですよ。そういう付き合いになるようなイベントしかうちはやりません。人寄せパンダのようなイベントはやりません。継続性の

あるものしか図書館はやらない。なぜなら「リビングルーム」だからです。そこから少しずつ関係性をつくっていきたいと考えました。

基本的な考え方、「モットー」です。「ここにいることが気持ちがいい」「何度でもここに来たくなる」「いつまでもここにいたくなる」という言葉をつくりました。これはお客さんに要求する言葉ではありません。職員がこう思わなかったら、ここにいることが気持ちいいというポイント、何度でも来たくなるポイント、いつまでもいたくなるポイントをお客さんに説明できないと意味がない。こういうことを私たちの図書館では開館までの3か月間、職員総がかりでずっとやりました。今も続いています。

みんなで「朝のブックトーク」をやりました。これまで本を貸したり借りたりが仕事だったので、声を発するということが司書にとってあまり関係なかった。職員の中には声が震える人、台本を作ってくる人などいろいろいました。今はみんなやるようになりました。2か月前にはワークショップで「あなただったらこの図書館をどういう図書館にしたいですか?」というテーマをアッケラカンとやりました。賭けでしたが、これをやることでいっぱい案が出てくるようになりました。出てきたアイデアに職員全員で「いいね!」マークを付け、そこに館長のマークも付けていき、職員と館長のマークが重なったものは全部やりましょう、としていきました。

「書架のディスプレイ」も続けています。立派な建築はできましたが、それだけでは何か足りない。それは「楽しさ」です。本を借りないおばあちゃんにいきなり借りてください、と言っても借りません。でもこの図書館を周ると、面白い展示がやたらと出てくる、展示は2か月1回変わっていく、そういうことがわかると、図書館にお散歩に来るんです。それが狙いです。

また、児童のコーナーに本棚と本棚の間に机と椅子のスペースがあったのですが、用途を変えさせてもらいました。設計事務所と相当やりあいましたが、こちらが運営を預かる身ですからやる、ということで通しました。そこで司書たちがやったことは、このスペースを全部商店街ディスプレイにしたんです。例えばお風呂屋さんの暖簾がある。暖簾を開けるとツペラツペラの『パンダ銭湯』という絵本が入っていて、そこから借りていく。楽しいわけです。

「館長に手紙が出せる郵便局」もあります。これはもう大変なことになりました。夏休みになると1日に10通以上入ります。私は毎日10通以上答えを翌朝までに書いて貼りださなきゃなんない。大変だけど、コミュニケーションするわけです。職員みんなで市民とコミュニケーションする。今までそんなことはできなかったんです。今までは苦情を言うためのカードしかなかった。これはそういう関係性ではありません。一緒に作っていこうという関係です。そうするうちに、司書たちが自分の名前を名乗り始めました。私は何も強制していません。今まで私たちは名乗りません、中立な立場なので情報は出しません、と言っていた司書たちがどんどん名乗り始めました。

「わんこカート」をつくりました。この巨大なわんこの胴体の背中が開いて、その中に絵本を100冊入れられます。これに絵本を積んで、私と司書で学校を回っています。私も絵本を

読みます。2年たった今も大活躍。こどもたちに名前を投票してもらったら、1600通も集まりました。岐阜中の子どもたちが応募してくれて「きらら」という名前になりました。だから学校へ行くと「きららー！！」と大きな声がかかります。「館長ー！！」とも言われます。ときどき「館長」でなく「カンチョー！！」とも言われますが、それもアリなんです。これまでは、本が鎮座しているのが図書館だった。だけど、酒田市の図書館は駅前にできるわけなのでそうではないじゃないですか。私たちの創った図書館も新しい対流を作るためのアクティブな図書館です。もちろん知識の殿堂も頭にありますが、敷居を下げたい。なぜなら図書館から離れてしまった人たちを振り向かせたいからなんです。

「文学散歩マップ」を作りました。本の貸し借りだけでなく情報の貸し借りをするために、本当に大事な情報を「聞き書き」で集めました。本当に大事なことは大事な人にしか言わないからです。そういうものをマップ化する。初日の出はどこから見たらいいか、花見はどこが一番いいか、小さなカードにして持って帰れるようになっていきます。

ヤングアダルトの専用席があります。中高生のみで大人は座れません。どんなにほかが混んでいても、大人は座らせません。これは武蔵野プレイスを真似しました。先行事例があったことで本当に私は救われました。次はどうぞぜひ酒田でやっていただきたい。

「ヴィレッジバンガードを目指す図書館」という言葉を私は赴任した初日に職員全員に言いました。みんな怪訝な顔をして、クスッと笑ったのは約5名。要は楽しい図書館にしたかったので、本のポップを取り入れました。「私はこの本を紹介したい」というものは自分の言葉でちゃんと伝えよう、ということをおみんなでやろうと決めました。中高生のボランティアもやりますし、司書もそれぞれのやり方でやっています。これをやることで司書がどんどん、変わっていきます。

DVDのコーナーも、普通はプライバシーのことがあるので壁で囲ってしまう。うちは全部見えるようにしました。面白いことが起きます。毎日来てチャンバラ映画を見ているおじいさんの後ろで、フフフと笑いながら見守っているおじいさんがいたりとか、春休みや夏休みには女の子同士でアニメを見ている、それをまた私が後ろで見守っている。この、見守る・見守られるの関係は、公園です。近づかない、直接声はかけない、でも温かく見守っている。こういう関係は岐阜ならば作れると思ったんです。そして酒田なら絶対につくれると思います。あのおじいちゃんの孫が来ている、ということがわかるからです。わからなかったらできません。プライバシーの侵害になります。目の見える生活範囲の中で暮らしていれば、できるんです。

「市民がつくる本棚」があります。たくさん読んでいなくても一生に一冊しか紹介できないけれど紹介したい本がある、みんなありますよ。読んでなくていいんです。引越してもこれだけは持っていきたい本、というのをみなさん胸の奥に秘めています。それを出してもらおう。それを薦めてもらえれば、そこから新しい関係が始まります。そうやってワークショップや大人の夜学などをやったり、とにかく敷居を下げようとした。

「みんなのお宝マップ」というものを作りました。司書が作ったんです。視察が年間220回

体くらい来ます。そうすると、「吉成さん、せっかく北海道から来たんだから、良い喫茶店知らない？」とか聞かれるんです。このマップがあれば、そこに行きますよね。そういう情報の扱い方も図書館ではやりましょうということです。「観光にならない観光」です。

子ども司書の育成はずっとやっています、それから子どものラジオということで館内にラジオ局を設けて市内に毎月発信しています。これをやることで子どもがどんどん、変わっていきます。本を黙読するだけでなく、本を読んで自分の心の中に動いた感情を言葉にして表す、これはリテラシーです。そういう訓練をして、楽しみながら勉強とは違う形でやった子どもたちは、大人になった時にめちゃくちゃ力が付いてますね。そういう子どもたちを育てたい。本を読ませるだけではダメだと思います。良い本を読んでも、その良さは読んでいる子にしか分からない。本が嫌いな子をどうやって振り向かせるか。それを図書館がやるべきだと私は考えています。「本のお宝帳」として本の感想を寄せられるような帳面をつくっています。

本を読みたい人にはどんどん読んで、という仕掛けもしています。3冊読んだらバッチがもらえるとか小技も駆使しています。作家の朝井リョウさんと呼んで、未来の作家を目指す中高生の育成もやっています。

「中高生と司書をつなぐ YA 掲示板」というのをやっています。これは昔のベストセラー『生協の白石さん』の図書館版です。名前を隠した文通です。始めて1週間で本に関する相談は皆無、全部人生相談です。恋愛の三角関係をどうやって清算するかとか、下ネタなんかも飛んできます。「下ネタも柔らかいジョークで返さないと司書じゃない！」と私は言っています。図書館にはユーモアが必要です。こうやって学校と図書館をつないでいく。さまざまなパイプを作って顔が見える関係にする。その厚みがあれば、図書館政策は後戻りすることはありません。

ビジネス相談は毎週1回やっています。ビジネス相談から始まった移動パン屋さんも開かれています。図書館の前で天体観望会をすると、400~500人くらい来ます。

まちの中に図書館を創っていく運動も進めています。これは「マイクロライブラリー」というやり方で、お店の軒先に本棚を置いたらそこは図書館と名乗ってもらう、ビルの空きスペースでも図書館と名乗ってもらう。それを8軒のライブラリーからスタートし、ついに「まちライブラリアン養成講座」を図書館が始めてしまいました。何のためにやっているか？図書館以外に本を置くスペース、本で人をつないだり会話できたりするスペースが酒田市中にあったら、と思うだけでワクワクしませんか？岐阜をそういうまちにしたいと思っています。図書館で婚活もやっています。

最後に、これからの図書館に必要なのは、「デザインができる司書」、それから「歌って踊れる司書」、これが絶対に必要です。こういう人を図書館員にすることです。そうしたら図書館は楽しくなります。ご清聴ありがとうございました。

司会：

吉成館長、ありがとうございました。ここにいることが気持ちいい、何度でも来たくなる、いつまでもいたくなるような、身近な滞在型の図書館を目指しているということ、さらに多様な市民を巻き込んでまちの中にも出ていくという、枠にとられない取組みがまちの活性化にもつながっているというお話でした。図書館は「まち」と「ひと」をつないで、まちづくりにも役立っているという、大変興味深いお話でした。

ここで10分間の休憩を挟みます。次のパネルディスカッションでは、スマートフォンを使って会場からのご意見、ご質問をスクリーンに映しながらリアルタイムでディスカッションするという試みを行います。お配りした資料にあるQRコードを読み取ることで簡単に参加できますので、スマートフォンをお持ちの方はぜひご参加ください。

—休憩—

司会：

パネルディスカッションを始めさせていただきます。最初に登壇者の皆様をご紹介します。コーディネーターは、青山学院大学の野末俊比古先生です。野末先生は、図書館情報学や教育情報学がご専門で、国や自治体、大学などの図書館関係の委員を歴任されるとともに、図書館の活性化や若い世代による図書館の活用について実践的に取り組まれています。

続いてパネリストをご紹介します。先ほどご講演いただきました武蔵野生涯学習振興事業団理事長の前田洋一様。同じく岐阜市立図書館館長の吉成信夫様。続いて工学院大学名誉教授の倉田直道先生、都市計画と建築がご専門で酒田駅前再開発事業の事業者選定委員会委員長であり、基本設計にも引き続きアドバイスいただいております。東北公益文科大学特任講師で酒田コミュニケーションポート（仮称）整備検討委員会委員の中原浩子先生、大学有志が集まって酒田の魅力発信に取り組んでいる「酒田おもてなし隊」をサポートするなど、観光やまちづくりの分野でも活躍されています。そして最後に若者代表として、酒田光陵高校の生徒会より2年生の小林凜生さんと金野龍さんに参加していただきました。このシンポジウムで発表するために、学校でグループワーキングを行って、意見を集約いただいております。以上の方々とパネルディスカッションを始めさせていただきます。

ここからの進行は野末先生よろしく願いいたします。

野末氏：

あらためまして野末です。よろしく願いいたします。みなさん、高校生二人がとっても緊張しているので、少し柔らかい顔でぜひ見守っていただきたいと思います。

前田さんと吉成さんのお話を伺っていかがでしたか？ 武蔵野市や岐阜市に住みたくになりますよね。みなさんの酒田市も今、そういうまちになろうとしているのだと私は受け止めています。今日はこのパネルディスカッションのテーマである「酒田駅前のまちづくりと魅力あふれる新しい図書館を目指して」の「魅力あふれる」というところについて、パネリストのみなさん、会場の方と一緒に考えていきたいと思います。前田さんと吉成さんのお話の中にキーワードがたくさん出てきました。これをどう酒田に活かしていくか、ということこれから考えていきたいと思います。

基本設計がいま、お配りされている資料にもありますが、こういう状態です。今後さらに細部を詰めて、具体的に中身をどうするかをみなさんと考えていく段階にあります。そういう節目にこのシンポジウムが開催されているわけです。それを踏まえて、本日は2部構成でシンポジウムを進めます。第1部は「まちづくりにおける公共施設の役割」について、酒田駅前の計画を基に考えていこうと思います。第2部はまず酒田光陵高校のお二人に学校でのグループワークの成果を発表していただき、魅力あふれる図書館とは一体どういうものか、具体的に考えていこうと思います。

このパネルディスカッションですが、みなさんにもご参加いただこうと思います。お手元にQRコードの付いた「会場からのご意見・ご質問の受付について」という紙があると思いま

す。スマートフォン、タブレット、パソコンなどインターネットにつながるものなら何でも結構です、このQRコードを読み取って「イマキク」というサイトにアクセスしてください。スマートフォンがない方には、事務局からメモ用紙をお渡ししますので、それに書いてこちらにお渡しください。「イマキク」に投稿いただいたご意見は全て記録に残りますので、本日いただいた全てのご意見・ご質問をこの場で取り上げることはできませんが、市とも共有させていただき、これからの計画に活かしていきたいと思います。個人情報や端末情報は取得しませんので、誰がどんな投稿をしたかはまったく分かりませんからご安心ください。ではちょっと練習してみましょう。今日参加されているみなさんのお住まいを教えてください。酒田市内か市外かでお答えください。意外と市外の方もいらっしゃいますね。7割くらいが市内の方のようです。では次に、みなさんの年代を教えてください。40代と50代の方が多そうですね。ありがとうございます。後ほどみなさんから、ご意見を受け付けますのでいったん、閉じていただいて大丈夫です。では続きまして、酒田駅前の再開発全体の概要、事業の狙い、それから公共施設である酒田コミュニケーションポールの役割、そこにかける思いなどについて、倉田さんからお話しいただきます。

倉田氏：

ご紹介いただきました倉田です。私は今回の駅前再開発の事業者選定委員会、それから実際の設計にあたっての調整会議に参加させていただき、いろいろと助言をさせていただきました。まず再開発についてお話しさせていただきますと、私も全国いろいろな都市の駅前を見ております。衰退した駅前を活性化するために再開発をやる、という事例も見てきておりますが、必ずしもうまくいっているとは限らないのが現状です。酒田市でもこれまでも計画があつたが頓挫し、実現に至らなかった経緯なども伺いました。これは事業的に成り立たないという要因が非常に大きくて、いくら商業施設を提案しても人が来ない、利用しない、ということで事業が成立しない。

このように非常に難しいわけですが、酒田市はそこに図書館を入れるという考え方であると伺って、それであればこの再開発はうまくいくかもしれない、と感じました。商業施設だけですと、最近の地方都市では車の便がいい郊外に大規模な商業施設ができてしまうので人はそちらの方に行ってしまう。中途半端に駅前に商業施設を持ってきても、一時的に人は来ても継続的に来る場所にはならない。そういう意味で図書館を持つてくるというのは、非常に素晴らしい選択をしたのではないかと思います。図書館を入れることで、そこが人が集まる場所になったという事例を私もいくつか見してきました。

そういう意味で、まちづくりという観点から図書館の存在は非常に気になっておりました。老若男女が一年を通じて利用するのが図書館です。ホールや博物館といった公共施設は、目的がないと行かない施設です。そこに常に市民がいる状態というものを考えた時に、図書館が非常に適切な施設だということ、まちづくりを通じて感じていました。ですので今回、

再開発の中に図書館が入るということで、この事業がうまくいく可能性を持ったのではないかと思います。

もちろん再開発事業ですので、事業として成立しないといくら図書館を入れても成り立ちません。事業者選定の段階では、事業が確実に成立するであろうというところを選びました。ただその時にやはり、人がここに足を運ばないことには他の民間事業も成立しないと思いましたので、少しでも多くの人々が足を運ぶような図書館にしないといけない、そのためには図書館自体の計画が十分ではないのではないかと申し上げました。その後図書館を含む施設全体の見直しをお願いしました。通常の再開発では、提案を受けた内容をそのまま設計に移すのが常ですが、今回の場合は、提案時の施設の配置自体も見直してもらいたいとお願いしています。

その一番大きなポイントは、当初の案は駅に一番近いところに広場があった。それは人が滞留するような広場ではなくて、玄関の前庭のような広場でしかない。それでは本当の意味で広場にはならないのではないかと考え、広場を施設を中心に持ってくることを提案しました。そこからすべてがスタートし、広場を中心にいろいろな機能がその周辺に配置されることで、広場がより人々の居場所としてつながってくる。広場の位置を変えたのが一番大きなポイントでした。ホテルのレストランの位置も広場に向けて持ってくるなどお願いしました。駐車場の側にも、広場に面したところにお店を持ってきて、バスの待ち合いも入ります。こうした機能を入れることで、すこしでもここに人が滞留するようなスペースを広場を囲むように持ってくる、広場に向かって見通しがあることで、広場を介していろいろな活動が一体化されるイメージを持たせ、人の動線にもなるということを考えました。

以上を踏まえ、図書館のあり方や内部の配置を議論しました。。その中でも一番のポイントは、広場に面した側に土間のような、あるいは縁側のようなスペースを設けることで外部と繋いでいく。このスペースは図書館の一部でもあるけれども外部空間でもある、間をつなぐ緩衝のスペースと位置付けて、ここにはカフェ、観光情報センター、展示スペース、お茶を飲みながらくつろいで雑誌を読めるスペースなどを配置しています。私自身も武蔵野プレイスやぎふメディアコスモスを拝見して、やはりこれからの図書館は人の居場所になる図書館にならないといけないと感じていましたので、市民のみなさんが気楽に立ち寄れる図書館にしたいということでこういったことを提案しました。

最初の設計提案はどちらかというと「本が主役」の図書館でした。それを「人が主役」の図書館にすべきではないかということです。酒田も地方都市としての例にもれず車社会です。人々の居場所というのがどんどんなくなってきている。職場と家庭の間にある空間が車しかない。車だけではない、図書館のような場所が人に居場所になる、サードプレイスという言葉もありましたが、そういう場所に図書館がならなければいけないのではないか。本を介して人々がつながる場所ということについて、先ほどからいろいろとお話がありましたが、私もまったく同じ思いで図書館を考えていましたので、このような提案をしたということです。

野末氏：

倉田さんありがとうございました。広場が中央にあって、その周りに人が集まるというイメージでしょうか。

倉田氏：

そうです。広場の南側はホテルのレストランです。西側にはお店もありますがバスの待ち合いがあります。バスを待っているちょっとした時間を図書館で過ごしてもいいんじゃないか、そんな図書館の利用の仕方もある。これは実際に他の場所でも事例があって、駅のそばで高校生が図書館で電車を待ちながら過ごすというところもあります。

野末氏：

倉田さんからは「人が主役」であるためのハード面のお話をいただきました。滞在型を目指すということは、滞在する人がどう動くか、をデザインするということだと思います。次に中原さんから、公共施設の運営、サービス面でどんなことを考えているか、ソフト面についてお話しいただきます。

中原氏：

みなさんこんにちは。酒田市民代表の中原です。前田さんと吉成さんの話を聞いて、ワクワクしませんでしたか？ 酒田にこんな場所ができたらとっても嬉しいな、と思いながら聞いていました。私は昨年度から整備検討委員として、いろいろな注文もしてきました。今回の駅前再開発は、図書館をつくるということではなく、「コミュニケーションポート」です。コミュニケーションとは、人と人がつながることです。ポートは港ですが、私たちのまちは「湊町酒田」です、さんずいに奏と書くほうの湊です。人や、物や、情報や知識が集まる大事な場所、という意味があります。今度つくるコミュニケーションポートは、人、情報、知恵、知識、そしてみなさんがお持ちのスキル、技術、夢や思いが集まる場所、それが駅前にできるのだと思っています。図書館をつくるというよりは、図書館という機能を使って、これだけの人が盛り上がり、まちを巻き込んでみなさんと一緒につくることのできるツールを使って、みんなの夢、思いをかなえる場所を駅前につくろうとしているのだと思います。みなさんの貴重な税金、財源を使って、酒田市は駅前にこのような素晴らしい建物をつくってくれます。でも、建物ができてもその中が魅力的でなければまったく意味がありません。それをつくるのは、私たち市民です。そして庄内地域、インバウンドで来る外国の方、いろんな方と一緒にやってつくるのがこの施設だと思います。行政というのは「公平」の原則があります。でも万人にとっていいものは、無難なものしかできません。無難なもの「ありきたり」です。せっかく酒田がつくるんです。日本海側には、このような大きな施設はありません。酒田はいち早く、この場所にこのような施設を作ろうとしました。無難なものをつ

くっても面白くないじゃないですか。酒田は北前船でいろいろな人、新しい情報が集った場所です。今でいえば一番ファッショナブルな、先端を行ったまちです。武蔵野にも岐阜にも負けない、でも素晴らしい前例があるのでそれを全部いただいて、そこに何かちょっと加えれば、先進になれるかもしれない。せっかくだから良いものをつくりましょう。それは酒田市、行政だけではできません。みなさんと一緒になって、みんながほしいものをつくればいいと思います。東北の人は心配症なので、こういう新しいものをつくる時にいろいろ心配すると思います。世の中にはいいことわざがあります。「心配することの9割は起こらない」と言います。起こるかもしれない1割については、前田さんおっしゃったようにちゃんとルールをつくれれば大丈夫です。みんなで作っていきましょう。

図書館の場合「静かな場所がほしい」という方がいますが、静かな図書館がいい方は、公益的に静かな図書館があります。レファレンスもしっかりして専門書もある図書館があります。酒田には、静かに集中できる図書館と、人々が生き生きと活動する図書館が、両輪として動き出すかもしれません。観光の視点から言うと、この図書館がデスティネーションとして、他の土地の人がうらやむ、ここに来てみたいと思うような場所をつくれればと思います。

野末氏：

ありがとうございます。コミュニケーションポートの中にある図書館は「ライブラリーセンター」と呼ぶんですね。コミュニケーションポートという名称への思い、とてもよくわかりました。ライブラリーセンターもあえて図書館という言葉を使わなかったのだと思いますが、そこは何か思いがあるのでしょうか。

中原氏：

「図書館」といってしまうと、どうしても既存の図書館、本を借りて返すだけという一つの役割だけを想定してしまうので、コミュニケーションポートの中のライブラリーセンターということで、複合的な多様な役割を担えるのではないかと考えています。

野末氏：

図書館って「図書」の「館」と書くんですね。でも武蔵野も岐阜もすでに図書の館では全然なくて、まさにコミュニティのセンターになっている。ライブラリーセンターというのは、とても良い名前だと思います。コミュニケーションポートとともに、コンセプトがよく表されている名前だと思います。

では、この計画をご覧になって、前田さんと吉成さんにお伺いします。それぞれの場所において、図書館を中心とした公共施設がまちづくりにどのように関わっていったかをご説明いただいて、そのうえで酒田の計画に対する感想、コメントをいただければと思います。

前田氏：

酒田市の計画を拝見して、立地といいキーワードといい、良い意味で私たちと思いが通ずるところが非常に多いと感じております。仲間が増えたようで嬉しく思っておりますし、心強く思っております。

武蔵野プレイスとまちづくりの関係ですが、駅前の立地を活かしたというのが非常に大きいんです。駅前の一番いいところにプレイスの北側公園と一体になったプレイスができることによって、周辺の施設が有機的に結び付けられました。武蔵野プレイスが出来上がる前に、JRが高架化をしました。これも長年の課題でありまして、武蔵境駅の東西の踏切は「開かずの踏切」と呼ばれて、まちが南北に分断されていまして。武蔵野市はどうしても吉祥寺というまちばかりが目立ってしまい、武蔵境は立ち遅れている、というイメージが住民の間にありました。しかしJRの高架化、武蔵野プレイスの開館によって、駅の北側にあったホールと駅の東側にあるイトーヨーカ堂がうまく役割分担をして、バランスのとれたまちとなりました。その結果まちのイメージも大幅にアップしました。知名度も上がったので、住民も武蔵境地区に対する誇りを持ち、まち全体が活気づいてきたように思います。

武蔵野プレイスの南側にマンションができたのですが、その販売促進用DVDの中で、周辺の施設よりも武蔵野プレイスの方が扱いが大きかったんです。デベロッパーは敏感ですから、住んでもらうためにはどこをアピールすればいいかよく感じ取っていると思います。いまでも年間70~80件の視察があります。武蔵境地区に何でこれだけ投資するのか、他の地区から文句が出ませんか、と聞かれますが、私たちは今ようやくここまで来たんだ、とお答えします。ツイッターやブログに「この施設があるからここに引っ越してきた」と言っていた方がいます。特に小さなお子さんがいらっしゃる方から聞くことが多いです。私が開設準備室担当になった時、部下たちによく「この施設ができることで武蔵境地区の地価をあげようじゃないか」と言っていたのを思い出します。

吉成氏：

中心市街地の一番北側にメディアコスモスがありますが、駅から歩いていけるかといったら、行けない場所です。歩くと30分、バスでも10分くらいかかります。それを考えると、酒田市の計画はめちゃめちゃ良い。岐阜で駅前に土地を確保していたら、もっとすごいことになっていたと思います。地の利があるということは非常に重要で、羨ましいと思います。先程、「観光にならない観光」という言い方をしましたが、岐阜も駅前に観光案内所があります。鶉飼とか岐阜城などへの観光案内はありますが、それ以上でもそれ以下でもない。ガイドブックに出ていないところは、人が語らないと分からないわけです。昨日酒田へ来まして、本間家旧本邸で話を伺いましたが、戦後は公民館として公共に何十年も開放して使ってきた、なんていう話はガイドブックに載っていないんです。そういう話は、公共というものを考えるうえで、ものすごく大きな話で、すごく東北的だと思います。儲からないことをやっちゃう、公益のためにやるというところ、それはすごく大きな財産になっていくと思います。

ライブラリーセンターを新しいものだけでなく、酒田のまちにあるもの、地元を掘っていくといろんなものが見えてくる。北前船で人も物も情報も集まってきた、その宝を持ち腐れにならないように、図書館の中に蓄えながらその出し方を練習していく。アウトプットの仕方を考えていくということが、ライブラリーセンターの意味ではないかと思って聞いていました。足元を掘り起こして、新しい時代に合わせて表現していく、分かりやすく伝えていくということも、ライブラリーセンターの「メディアとしての役割」だと思います。

野末氏：

ではここで会場のみなさんからご意見をいただきたいと思います。酒田駅前の計画、あるいは一般的にまちづくりと公共施設の話でも構いません、それから基調講演に対するご意見やご質問、などについてお聞かせください。

みなさん入力している間、せっかくですから前田さんと吉成さんに酒田のまちの印象をお伺いしたいと思います。

吉成氏：

やはり食べ物ですね。「宝石ちらし」は美味しかった。魚は日本海は身が締まっていて美味しいですね。食材の豊かさは非常に深く感じましたし、どうしても見たかった土門拳記念館も見ることができました。こんなにもたくさんのものが酒田にあることを知って驚いています。

前田氏：

武蔵野市はいくつか友好関係がある都市がありますが、これまで酒田市にはご縁がなく伺うことができませんでした。今回伺えて本当によかったと思います。酒田の歴史に触れて、酒田市の持つ潜在的なパワーを感じることができました。

野末氏：

賛同が多いご意見から見ていきましょうか。「若者の居場所になればいいな」「若い人や子どもたちが笑顔で過ごせる場所になってほしい」など、若い人や子育て世代、子どもたちへの思いはみなさん共有されているのかなと思います。

倉田さん中原さん、これまで計画を作ってきた中で、若者や子どもたちへの思いはどんな議論があったんでしょうか。

倉田氏：

細かいところはまだ検討中ですが、1階の土間のような空間につながるところもできるだけ市民の方が気楽に立ち寄れるようにする、その一角に子どもたちのスペースもしっかり用

意されています。岐阜ほどは広くありませんが、逆に広くないスペースを上手に使う、例えば最近はその「重ね使い」と言います。これは一つのスペースをいろいろな目的で使うことです。その結果、ゆとりあるスペースではできない、いろいろなつながり、関わりができてくる。子どものスペースのすぐ隣には大人のスペースもある、先程吉成さんの講演にあった相互にそこで見守る関係も生まれるだろう。親だけでなく図書館を使っている大人たちが、子どもたちを何気なく気にかけてくれる関係ができてくるだろう。そういう意味では、限られたスペースを利用する中で、新しい人のつながりが生まれることを期待しています。

中原氏：

学生から聞くのは「Wi-Fi があったら嬉しい」とか「ゆっくり休める場所がほしい」など、本を読まなくても立ち寄れる場所がほしいということ。それからお子さん連れのパパママさんたちが遠慮なく、子どもが泣いてしまうのが怖くて行けないようなことがないように、気にしないでいいような場所になってほしい。そして夕方になったらジャズを流して、バーボン飲みながら雑誌を読みたいですね。あ、若い人関係無かったですね。

野末氏：

いいですね！私も飲みたいです。

他にもいろいろ意見が来ています。今世の中で注目されている図書館のほとんどすべてが複合施設です。例えば、安城、富山、熊本、塩尻、福智、瀬戸内。それがうまくコミュニティの中核になっているんですが、以前はバラバラだったものがうまく結びつくには何が必要なのか。複合施設をうまく運用していく、活用していくポイントを前田さんと吉成さんにお伺いします。

前田氏：

一番手っ取り早いのは「組織を一つにしてしまう」ことです。武蔵野プレイスは公益財団法人が指定管理者になっていますが、これは一体的な運営を担保するために財団が引き受けたんです。組織が一つになれば、各々の担当は同僚ですから、基本的にコミュニケーションは担保できます。可能でしたら組織を一つにする、もしくは緩やかな集合体にすることで連携の可能性は高まると思います。

吉成氏：

当館は開館してまだ2年半くらいなので、どこまで連携できているかという、そうでもありません。共通の会議として、月2回打合せをしています。一番大きいのは、施設の構造上お互いが見えるということです。課は違ってもお昼を食べる場所は一緒、とか、まずは職員が交じり始めないといきなり連携といっても難しい。むしろ市民との連携の方が強いですね。市民の力を使いながら、だんだんと周りの課とも連携を進めていく、その途上にあるという

感じです。

野末氏：

それが先ほどの学校に出かけていくとか、まちライブラリーをつくるとかいうことになっているわけですね。施設内だけでなくコミュニティ全体での連携という時代に入ってきているんですね。

本当に沢山のご意見をいただいていますので、いったんお預かりして、よろしければですが、これはといういくつかの質問について、パネリストの皆さんや市で回答を作っていただき、まとめて後日公開する、ということでいかがでしょうか。大丈夫とのことですので、お願いいたします。せっかく沢山いただいたのに、この場で取り上げられずに申し訳ありません。では続いて「魅力あふれる新しい図書館について考える」ということで、最初に光陵高校生のお二人に、学校でみんなで考えたことをプレゼンしてもらいます。よろしくお願いします。

小林さん・金野さん：

みなさんこんにちは。いつもの僕たちは笑ったりふざけたりしている「ぼ・か・も・の」ですが、今日は若者「わ・か・も・の」として、話をしたいと思います。

私たち光陵高校生徒会執行部は、ライブラリーセンターについてグループディスカッションをしました。どのような場面でライブラリーセンターを活用するか、について話し合った結果、電車を使って登下校している生徒が多いので、電車を待っている間などにライブラリーセンターで時間をつぶしたり、放課後に友達と遊んだり、テスト前の勉強やレポートなどの調べものなどで使用したいと考えています。

ライブラリーセンターに欲しい設備ですが、ヒーローショー、電子書籍（タブレット）、本の消毒機、アスレチック、祭りのようなイベント、リラックス空間、本屋、児童用にお絵描きコーナー、印刷機、コピー機、有料のイベントスペース、資格の参考書、映画館、有料のコンセント、などが挙がりました。

子どもたちを対象にヒーローショーを不定期で行うことによって、ライブラリーセンターに小さなお子さんや親御さんたちに多く足を運んでもらう機会になると思いました。また、子どもたちが本以外にも楽しく遊べるように、お絵描きコーナーなども設置してはどうでしょうか。

資格の参考書を置いたり、レポート作成などもできるように有料の印刷機やコピー機を設置したり、中高生が利用しやすいようになればいいと思います。部活で疲れた方向けに、個室やリラックスできる空間があればうれしいです。

佐賀県の図書館では、書店を併設しているところがあり、酒田のライブラリーセンターでもその仕組みを取り入れて、販売を行うコーナーがあれば便利だと思います。

本の消毒機を設置することで、きれい好きな方はもちろんのこと、衛生面にも気を遣うことでこどもからお年寄りまで幅広い年齢層にも利用してもらえそうです。

タブレットなどを設置、または貸出をすることで、タブレットの操作に慣れている人には便利だと思います。

イベントスペースもあるようですが、友だちの誕生日などの小さなイベントができるようにすることで、たくさん高校生が利用してくれると思います。

勉強や読書の合間にちょっと体を動かしたくなったとき用に、ボルダリングなども流行っているので、室内用のアスレチックや遊具があるといいです。こどもたちをさせるように複数の種類があると、よりよいと思います。

これで発表を終わります。

野末氏：

ありがとうございました。ここまで「まちづくりと公共施設について」「魅力あふれる新しい図書館について」それぞれ考えてきましたが、いまの高校生の発表について、ここはいいな、と思ったところ、あるいはライブラリーセンター、コミュニケーションポート全般についてでも結構です。またみなさんご意見を書き込んでください。

では中原さん、いまの高校生の発表について、ここはいいね、と思ったところなどありましたらお願いします。

中原氏：

フリーWi-Fiは高校生も大学生も必要ですね。

別のところで聞いた意見ですが、ライブラリーセンターで結婚式をやったらいいんじゃないか、というのは素敵だなと思いましたし、アスレチックがあって、本を読みながら体を動かせるのもいいなと思います。

大学生に聞いたところでは、今はSNSの時代ではありますが、手紙をかけるスペース、紙に向かって手紙を書いて酒田から出せるスペースがあると、住民だけでなく観光客もうれしいのではないかと。また、バーチャルリアリティで晴れた時の秀麗な鳥海山、四季折々の庄内の風景を見ていただける、本間家、北前船、三十六人衆などの歴史も見られる仕掛けがあるとよいのではないかといい声もありました。

ライブラリーセンターで結婚式、どうですか？

小林さん：

いいと思います！

中原氏：

本の間を腕を組んで通って、食事はホテルのレストランで。

野末氏：

確かに一通り揃っていますね。吉成さんのところでは婚活をやられているので、もしかしたら岐阜が先にやってしまうかもしれませんね。人と人が、人生の節目節目でライブラリーセンターに集ってくるというのは、とてもいいですね。

それでは、会場のみなさんからいただいたご意見を受けながら、パネリストのみなさんとお話を進めていきたいと思います。

ヒーローショーは集客力抜群のイベントで、とてもいいと思います。ご当地ヒーロー、あるいはコミュニケーションポートのヒーロー、キャラクターがいるといいなと思います。

無料の Wi-Fi については、ビジネスマンにとっても重要で、電源と Wi-Fi はインフラと言っていると思います。先ほどコワーキングスペースという話がありましたが、ビジネス支援というところの話をしてみたいと思います。

前田さんと吉成さんにお伺いしたいのですが、ビジネスへの支援、あるいはもう少し広く「まちづくり」とか「まちおこし」とか、そういうことへの支援についてはどのような方針、コンセプトの議論がありましたでしょうか。

前田氏：

武蔵野プレイスは図書館としては分館なので、たくさんの本を置く、専門的な本を置くというのはなかなか難しかったということもあり、むしろビジネスマンの居場所を確保しようということで、ワーキングデスクを設置しました。やりたいことが少しでも完結できるような仕掛けをつくっています。

吉成氏：

レファレンスコーナーに週 2 回、コーナーをつくって県と組んでよろず相談を行っています。県からコーディネーターとして中小企業診断士の資格を持った人を派遣してもらっています。それは単なる場所貸しではなくて、ビジネス関連の司書にも横に座ってもらって、起業の相談に来た人たちの相談に乗っています。起業の相談が本格的になってくればコーディネーターの仕事ですが、その前段階の相談、主婦が気軽にやれるようなレベルの起業、例えば月 3 万円ビジネスのようなものを守備範囲としています。さらに本格的になってきたら、専門の部局に行ってもらおうよう紹介しています。図書館は相談がしやすいので、1 年目は県の出先機関の倍の相談が来ました。2 年目に週 2 日になりました。広場がありますので、お店を出すお金がなかったら広場を貸しますよ、というノリでやっています。見えている場所で完結できる面白さがあります。

野末氏：

熊本市のビジネス支援では、確か 1 年間無料で部屋を貸し出すということをやっています。図書館だけでなく、民間や市の部局と連携しながらやっていくこともポイントかと思いません。

倉田さんと中原さんにもお聞きしますが、仕事の支援、ビジネス支援、資格の取得支援等といったことについては、これからどんなふうに考えていこうとしていますか。

倉田氏：

今回の事業者提案の中にも、コワーキングスペース、地域の起業を目指すような人たちのスペースを確保したらどうかという提案もありました。私自身も、余裕があったらそのようなスペースがあったらいいと思います。ただ酒田の中にもすでにコワーキングスペースのようなものはあるので、あえてライブラリーセンターにコワーキングのような限定されたスペースを設ける必要はないかもしれません。職場でも家でもない、カフェのようなところでちょっと仕事をしようかという感覚はあると思うので、高校生が勉強をしている場でビジネスマンも仕事ができる、場所をシェアするようなことはあってもいいと思います。

今回の計画では3階は本が無いスペースです。かなりいろいろな利用ができるフリースペースで、鳥海山も見える。勉強もできるし、セミナーをやったり、ちょっとしたイベントもできるという場所になれば、人が主役の図書館になると思います。

市民が積極的に運営に参加する図書館になるといいと思います。参加することで、自分たちの図書館だという自覚を持てますし、自分たちがつくったルールの中で活動ができる。幅広くいろいろな方が参加するような図書館になればいいなと思います。そうすることで、みんなで作るライブラリーという雰囲気も出てくると思いますし、複合施設の運営を市民がつなぐ、サポーターができてNPOができて運営に参加するというケースもあります。いろいろな可能性があるんじゃないかと思います。

中原氏：

シブヤ大学のように、市民が運営に関わってみんなで作っていくのが大事だと思います。コワーキングスペースについては、大学にもありますし、さらにもう1か所できます。ライブラリーセンターには場はなくても、つないであげる人がいればいいのかなと思います。起業したいという人がいれば司書が場所を紹介する、そういうつながりがあればいい。酒田はそういう人がつながれるまちだと思います。

野末氏：

つなげていく、まさにハブのような役割になっていくということですね。利用者との協働はあらゆる館種の図書館でキーワードになっています。酒田なりの良いモデルができていくと思います。

先ほどの高校生の発表の中で資格本の話が出てきましたが、なぜあえて資格なのか、どういう議論の中で出てきたんでしょうか。

金野さん：

光陵高校は専門科がたくさんあって、資格がたくさん取れる学校なんです。それもあって、資格の本が手軽に読めるような環境があればいいなと思いました。

野末氏：

例えばどんな資格を取るんですか？

金野さん：

環境科だとコンクリート検定、計算技術検定、建設業経理士などがあります。

野末氏：

たくさんあるんですね。それはやはり自分の将来の仕事に役立てていこうということなんですね。

それから「お絵描きコーナー」というのがありましたが、これ実は大学でいま、ホワイトボードで壁面が全部書けるようになっている図書館があって、流行っています。ディスカッションしながら、遊びながらみんなで共有しながら書くというのは重要な行為なんです。ですからこれは子どもだけでなく大人のコーナーにもつくったらいいのではないかと思います。

「軽く体を動かせる」という意見も上位に来ています。図書館などに行った時、ちょっとしたスペースがあれば体を動かしたいというニーズがおそらくあるのでしょう。これについてどなたかいかがでしょうか。前田さんのところには既にありますよね。どのように使われていますか。

前田氏：

私のところでは主に青少年を意識してつくっていますので、ボルダリングもありますし、卓球台もあります。職員の間では「いまどき卓球なんて」という意見もあったのですが、人気があります。休みの日などは1時間待ち2時間待ちになるのですが、皆さん勉強して待っています。こちらが想像した以上にうまく使い方をしてくれています。

野末氏：

高校生の発表に、少人数で利用できるスペースという話もありましたが、これもかなり重要なポイントかなと思います。図書館はこれまでひとり静かに読書をして情報をインプットする場だったのですが、例えば親子で本を探すとそこで会話しながら探すわけです。高校生も友達同士で利用したいとか、利用の場面というのはいろいろあるわけです。しかも情報をインプットするだけでなく、活用して発信する場面も図書館に求められている。それがビジネス支援や子育て支援という場面に出てくるわけですが、典型的に現れるのがイベントスペースだと思います。自分たちが得た情報、学び考えたことを発表していく、周りとも共有し

ていく場になるのだと思います。みなさんにお伺いしますが、イベントスペースをどんなふうに使いたいですか？ これはまず高校生のお二人に聞いてみたいのですが、具体的にどんなアイデアが出ましたか？

小林さん：

友だちの誕生日を祝ったり、部活の祝勝会などに使えればいいんじゃないかと思います。

野末氏：

部活の祝勝会はかなりいいアイデアですね。学校の中でやっていたら分かりませんからね。ライブラリーセンターでやれば、この学校の部活はいい成績を取ったんだということが地域の人にもわかります。コミュニティの中心になるというのはそういうことで、お互いの活動が見えるということだと思います。

吉成さんと前田さん、図書館のスペースがこれまでこんなふうに使われていたとか、今後こんなふうに使われたいなどのアイデアがあれば教えてください。

前田氏：

武蔵野プレイスにはギャラリーというセミオープンスペースがありますが、そこでワインを飲みながらのイベントをやったりします。若者向けにはバンド練習室やダンスの練習ができるスペースがありますが、その成果を発表する場をつくってあげることも重要です。中学生から大学生まで、企画段階から参加する。普通中高大学生と一緒に企画をするなんていうことはありません。照明も受付もやる。達成感がまったく違います。

野末氏：

「公益大生が活躍できる場がほしい」という意見もありましたが、酒田ではそういう場ができそうですね。

吉成氏：

専門学校生 150 人くらいとファッションショーをやりましたが、めちゃ面白かったですね。

次々とお立ち台に立って、それをまた通りがかりの人が見ていく。それがいい。

4~5 人程度の小さな部屋も、開館当時から使いこなしています。開館初日に小学生が 3 人くらい来て、パソコンで申込みして使っている。それが見える。そういうバラエティに富んだ面白さがあります。

野末氏：

「見る一見られる」の関係、カラーニングとありますが、お互いに何をやっているかが緩やかに見える関係、こんな使い方もある、この活動はイイね、とお互いに見えることで活動を

高めていくことが、最近の公共図書館では行われ始めていると思います。

地域子どもたちが教え合う、そこに時々大人が交じって、学び教え合うことがあっていい。図書館には学ぶための資料・情報やツールがたくさんあるんです。こういう雰囲気を醸し出すような施設づくり、それを人がサポートしていくことがポイントになっていくのかなと思います。

皆さんから沢山いただいたご意見・ご質問、すべてご紹介できず申し訳ありません。必要なものには回答を付けて、後日公開し、共有したいと思います。

では最後に一言ずついただきたいと思います。まず高校生のお二人に本日参加した感想をお聞きしたいと思います。

小林さん：

今日は貴重なお話ありがとうございました。酒田のライブラリーセンターはこれからつくるので、みなさんの話はとても参考になったし、取り入れていきたいところもあったので、これからどんどん良くなると思います。

金野さん：

自分たちは高校生だけで話し合ったけど、いろいろな年齢層の人たちの話も聞いて貴重な体験になりました。

野末氏：

ありがとうございます。では他のパネリストの方からも一言ずつ、酒田コミュニケーションポートへのエールをお願いします。

前田氏：

計画を拝見すると、私どもと相通ずるところが多々あると感じております。非常に丁寧に計画をつくっていらっしゃる印象です。図書館と他の機能をうまく組み合わせることで、まちづくりにとってものすごいパワーが生まれます。酒田にはそうした潜在的なパワーがあることを、会場のみなさんも感じたのではないかと思います。開館までにまだ若干年数がありますが、開館は決してゴールではありません。そこからが新たなスタートです。この事業によって酒田市の新たな歴史、次のステージがスタートすると思います。器ができたなら、その器に魂を込めるのが市民のみなさんだと思います。市民のみなさんが主役です。この施設が家でも学校でも職場でもない、第三の場所として市民に密着した、無くてはならない憩いの場、ワクワクする場になることを願っています。

吉成氏：

高校生の話に出てこないなあと思っていたことがあって、間違いなく夜の図書館はデート

スポットになります。こんないいデートスポットないですよ。これは予見しておきます。もうひとつ、鳥海山はやはりキーワードです。岐阜は岐阜城のあった金華山です。金華山が見えるところが外に出られるようになっているので、夜にちょうちんをつけると岐阜城が浮かび上がって見える。鳥海山をどう使うか、とても楽しみです。

倉田氏：

図書館づくりは「まちづくり」だと思っています。まちづくりという言葉のほか、「まちづかい」という言葉が最近使われたりします。これからは図書館を自分たちのものとしてどのように使っていくか、について市民のみなさんに参加していただいて、今日出た意見を実現するような取り組みをしていただきたいと思います。

図書館のスペースはかなり限られていますが、限られたスペースだからこういう使い方はあきらめるのではなく、使い方ですらでも工夫ができる。同じ場所をいろんな人で、いろんな使い方をする「重ね使い」など、これからは使う側の知恵が大事になってきますので、みなさんの知恵を思いきり出して、酒田らしい図書館にしていきたいと思います。

中原氏：

みなさんの夢や思いを、このライブラリーセンターを使って実現していきましょう。できればみなさんが運営側にまわって、「ライブラリーセンターづくり隊」「つかい隊」というようなチームができるといいなと思います。無難なものは感動を与えない、といいます。みなさんでやりたいものをつくれれば、きっといいものができると思います。知恵を集めて、そこから始まると思います。ぜひみなさんと一緒になっていいものをつくりましょう。

野末氏：

図書館は目的ではなく手段です。利用者の皆さんのために図書館はあるので、皆さんの夢を実現していくためのものとして、いいものができるかと私も確信しました。皆さんもエール入力できますのでどうぞ！

中原氏：

高校生が最後に何か言いたいそうです！

小林さん：

校長先生から、これだけはアピールしてこいと言われたので！光陵高校の生徒はいろいろな委員会でいろいろなボランティア活動をしています。公園ボランティア、森林のゴミ拾い、河川掃除、インターハイの補助員もやりました。毎年、酒田まつりの手伝いもしています。ライブラリーセンターができたならライブラリーセンターの役に立てるよう、光陵校生もどんどん協力していきますのでよろしくお願いします！

野末氏：

光陵高校の強力なサポートも得られたところで、最後に、エールを受けて酒田市立図書館長から決意表明をいただきます。

図書館長：

本日はパネリストのみなさん、会場にお集まりのみなさん、貴重なご意見をありがとうございます。たくさんのご意見をいただいておりますが、その中で「ハブのような、拠点になるような施設」という話がありました。現状の図書館を地方空港とすれば、新しい図書館はハブ空港として、いろんなところから線が伸びてきて、それが市民であったり団体であったりが来て、いろいろな情報を発信するようになっていかなければいけないと思いました。これから市民のみなさまのご助言もいただきながら、市民のハブになれるよう頑張っていきたいと思います。本日は本当にありがとうございました。

野末氏：

最後に講演者、パネリスト、高校生みなさんに拍手をお送りください。

司会：

どうもありがとうございました。貴重なご意見、会場みなさんからもたくさんのご意見をいただきました。市民の期待が大変高いことをあらためて感じております。これからの施設づくり、図書館づくりに活かしていきたいと思います。

以上をもちまして、「酒田駅前まちづくりシンポジウム」を終了いたします。